サウディ・アラビアの考古学的調査（JICA Project）報告

Report of the JICA Project of the Archaeological Survey in Saudi Arabia

Mutsuo KAWATOKO

JICAによる「サウディ・アラビア遺跡発掘調査計画」は、2年目の準備段階を終了した。サウディ・アラビアが外国人に門戸を開くことを決定した後、2001年1月、2002年1月～3月、2002年9月、2003年1月～2月に訪問、調査および諸交渉を実施した。この結果、発掘調査に関わる諸技術を移転しつつ、イスラーム時代の遺跡発掘調査、プレ・イスラーム時代の遺跡発掘調査、諸言語による岩壁碑文調査を実施することが、JICAとサウディ・アラビア教育者考古博物館との間で基本的合意（日本西アジア考古学会など3学会の小委員会等からなるサウディ・アラビア研究者が調査研究を担当する）に達した。一期3年間、3～4期を計画している。

2003年12月から、紅海沿岸に位置するプレ・イスラーム時代から初期イスラーム時代に栄えた港市ジャール遺跡の発掘調査、ジャール al-Jär〜ヤンブYanbu'地域から聖都マディーナ al-Madīna にいたる諸ルート上の岩壁碑文調査およびナジュラーン Najrān 地方ビィルヒイマヒbir Hīmā〜ヤダマ Yadama 地域の岩壁碑文調査を実施する。すでに、ジャール遺跡の予備調査、碑文調査の一部を実施し、多大な成果を挙げているので、今後の成果が大いに期待できる。なお、プレ・イスラーム時代の遺跡については調査地域別の段階にある。

キーワード：サウディ・アラビア、ジャール、岩壁碑文、港市、JICA、ナジュラーン

The Japan International Cooperation Agency (JICA) Project "Japanese Technical Cooperation for Archaeological Survey and Excavation Planning" has finished its second year of preparations. Just after the Kingdom of Saudi Arabia decided to accept foreign archaeologists to survey in the kingdom, we visited there for the surveys and negotiations in January, 2001, from January to March, 2002, September, 2002, and from January to February, 2003. Consequently, JICA and the Deputy Ministry of Antiquities and Museums agreed to the following surveys.

1. Excavations in the Islamic site.
2. Excavations in the pre-Islamic site.
3. Survey and study of the rock inscriptions in various languages.

The term of this project is three years and we are planning to continue it for three or four terms. This project has two purposes: One is to apply Japanese archaeological techniques to the surveys, and the other is to establish and develop the study of Saudi Arabian archaeology in Japan. So, we formed a Saudi Arabia study group based on three academic associations named here: the Japanese Society for West Asian Archaeology, the Japan Association for Nilo-Ethiopian Studies, and the Japanese Society for Arid Land Studies.

Now, we are planning to promote full-scale excavations from December, 2003 in the al-Jär site, a port city on the Red Sea coast of the pre-Islamic and Islamic periods. Also, we started an exhaustive survey and registration of the rock inscriptions in the al-Madīna al-Jär/ Yanbu'a area in Ḥijāz and the Bir Hīmā/Yadama area in Najrān. We have already conducted preliminary surveys in the al-Jär site and partial surveys and registration of the rock inscriptions in these two areas. We feel certain that further excavations and surveys will produce a great contribution to the world of Saudi Arabian archaeology.

Key-words: Saudi Arabia, al-Jär, rock inscription, port city, JICA, Najrān
調査に至る経緯

JICAによる「サウディアラビア遺跡発掘調査計画」は、2年目の準備段階を終了した。この間、2001年1月、2002年1月～3月、2002年9月、2003年1月～2月に訪問、調査および諸交渉を実施した。この結果、発掘調査に関わる諸技術を移転しつつ、イスラーム時代の遺跡発掘調査、プレ・イスラーム時代の遺跡発掘調査、諸言語による岩壁碑文調査を実施することが、JICAとサウディアラビア教育省考古・博物館庁との間で基本的合意に達した。一期3年間、3～4期を計測している（図1）。

2002年9月の正式交渉では、紅海沿岸に位置する初期イスラーム時代に栄えた港市ジャール遺跡の発掘調査、ジャールal-Jār＝ヤンブYanbu'地域から聖都マディーナal-Madīnaにいたる諸ルート上の岩壁碑文調査およびナジラーンNajrān地方ピル・ヒマービリ・ヒミア～ヤダマYadama地域の岩壁碑文調査が決定し（図2）、プレイスラーム時代の遺跡についてはワジフal-WajhあるいはサージャThājを対象にするか否かを検討中である。

ジャール遺跡

ジャールはアラビア半島の北西部ヒジャーズHijāz地方の港市で、プレ・イスラーム時代からイスラーム時代中期まで使われた遺跡である。聖都マディーナがヤスリブYathribと呼ばれていたジャヒリーヤJāfiyya時代（プレ・イスラーム時代）にも機能していた港で、イスラーム時代に入ると、穀倉地エジプトから小麦などの物品をイスラーム共同体の首都マディーナに運ぶための港となり、北紅海の主要港として大いに繁栄した。

ジャールはマディーナの浜で、マディーナまで3日行程である。ジャールはジュッダJuddahよりは小さいが、北紅海の重要港で、中国al-Shīn、インドal-Hind、波斯、マーラーンUmān、アデン'Adn、ジュッダ、トゥールal-Ṭurの浜、アイラAyla(現在のアカバ)、ラーヤRayaの浜、シンナイ島東南西部、そしてクルズムQulzum(現在のスズ)を結ぶ港である。10世紀のイブン・ハワカルIbnHawqalによれば（図3）、紅海沿岸には、ジュッダから北へ、ジャール、ラーヤ、アーシャ'Aṣīn、アイラ、ラーヤ、クルズムといった港が続いている。アデンからジュッダが1ヶ月、ジュッダからジュフフal-Jūfhaが5日、ジュフフからジャールが3日、ジャールからアイラが20日行程である。

また、ブレーマイオスの『地理誌』に記載されるイアムビア村λεμβίακόμη（第6巻第5章第3節、現在のヤンブYanbū）の南にあるコパル村Κοπάρικόμη（第6巻第7章第5節）がジャールであろうと考えられる（細田1986：103、図版XXI）。

イスラーム時代に入ると、預言者ムハンマドが派遣したエチオピアal-Habashaへの移民が2隻の船でジャールに戻って、マディーナに向かった。その後、カリフウマルUmarbinal-Khaṭṭābはエジプトの征服者であり、総督であるアムルAmrbinal-ʿĀṣでエジプトの穀倉をマ

図1 サウディアラビア全図
図2 調査地の位置関係
図3 10世紀の地図
ディーナに送るよう命じた。アムルは3000イルダブッ前後の穀物を積んだ船20隻をクルズム経由でジャールに運んだ。ツルフはジャールに赴き、2つの城を建設し、穀物をその中に保管した。11)

こうして、ジャールはエジプトの小国などを含める「マディーナの穀倉」22)となった。アラビアのスラム・スルマによって12)、「ジャールは海辺にあり、エチオピアのハバスはエジプトミスリの地、そしてパフランと中国から船が来る。そこには農業台minbar [が設置されたモスク]がある。ジャールは住民が深い村qaryaで、海に注ぐワディ・ヤルヤルワディヤライの水を飲む。ジャールには多くの城qušūfがある。ジャールは2つに分かれていて、半分は1マイル離れた海の中の島であり、陸地のジャールに面している。カラーフQarāfと呼ばれる島はエチオピアの船専用である。島の住民はジャールと同様に商人である」というほどに繁栄した。10世紀のムカッダスい-al-Muqaddas)によれば、ジャールは海岸にあり、3つ壁に囲まれ、海に向かって開いている。建物は高木建立、スーク（市場）は繁栄している。ジャールはマディーナの穀倉で、水はパドゥルから、食料はエジプトから運んだ。

まずいるの様子が現れる。

しかし、10世紀には度々、遊牧民の襲撃があり、11世紀にナースィル・アルフース・ナシル・イクスラウが訪れたときは、小さな村となっていた（Scheffer tr.1881; 123)。そして、12世紀頃、ジャールは衰退し、13世紀初頭にはヤンブにその地位をと言って代わられることとなる（Ministry of Communication 1999: 42; Ghabban 1993: 18-22)。

この後、19世紀初頭にはJ.W.ブルクハルト（Burchhardt 1829; 403）など多数のヨーロッパ旅行家たちがジャールの地に位置するブライカ・アル・マフヤッタに寄港した。しかし、

この港の位置はわからない。

ジャール遺跡はサウディ・アラビア王国西部遺跡区に位置する（図4）。マディーナの南西約140km、パドゥルBadrの西南西約30km、ヤンブの南東80km、ラーサール・ラヤシの北西約10kmにあるブライカ入江の東側にある。

入江にはパドゥル方面からワーディ・マファイタワダイフMafaytnaが流れ込んでいる（図5)。


考古学的調査は考古・博物館局によって1980年7月に実施された。試掘を含む探査調査（Killlick, et al. 1981: 51-53, pls. 46, 51, 57, 58, 63, 64, in Arabic 46-47)の結果、ジャールは遺跡として認定され、フェンスで囲まれた（遺跡番号210-315)。5角形のフェンス13)通遺跡を完全に囲っているわけではないが、重要な遺構はフェンス内にある（写真1)。

この調査によって、ムカッダスの記事にあるコの字型の城壁が残っていること（写真2）、建造物はサンゴ・ブロック造りが主体であることが（写真3）、日乾れ道が造りの部屋がや城壁内外に多数のマウンド（写真4）があり、遺構が含まれている可能性が高いこと、水中にも遺構があるため、城壁の北東部240mの中ごとに貯水槽があり、土壌とガラス器はイスラーム時代からオスマン朝支配時代のものであること、350-353年のローマ・コインは発見されたが、ローマ時代の土壌は欠如していることなどがわかった。

図4 サウディ・アラビア考古・博物館庁の遺跡区分
図5 ジャールとブライカ周辺図
写真１ ジャール遺跡
（フェンスに囲まれた遺跡指定区は広大である）

写真２ コの字状遺構

写真３ サンゴ・ブロック

写真４ 城壁内外のマウンド

われわれは、2001年1月にジャール遺跡を訪れ、2002年1月に地上から遺構確認と遺物観察を行った。そして、2003年1月に遺構の簡易測量、表面採集、周辺地域の遺跡調査を実施した（図6）。

遺構に関しては、1980年の調査によって明らかになった遺構の再確認を行った。その結果、コの字状の壁はおおむね正確に図示されていた。北西壁は約282m、北東壁は約215mで、中央付近に13×7.2mの突出部があり、南東壁は約116mであった。壁の厚さは約1.6mである。これに対して、壁の北東方向にある貯水槽は、規模はおおむね正確であるが、基準軸が約90度間違って図示されていたことが判明した。

遺物に関しては、図9に見えるように、36箇所で約100点の遺物を表面採集した。全体的にガラス器の破片が多く、土器、イスラーム陶器の類は少なくなかった。また、予想以上に中国陶磁器が多数発見された。全体的に強い塩分に侵されて、保存状態は劣悪である。特に、土器、イスラーム陶器は表面のみならず、内部まで塩分が侵食している場合が多かった（写真5）。

さて、中国陶磁器は白磁が中心であるが、越州窯青磁が少数採集された。図7-10は10世紀前半から中頃の越州窯青磁、図7-11は11世紀後半から12世紀前半の越州窯青磁である（写真6、7）。図7-1〜9の白磁はすべて10世紀後半から11世紀中頃のものである（写真8〜11）。
<table>
<thead>
<tr>
<th>No.</th>
<th>出土ポイント</th>
<th>種類</th>
<th>器形</th>
<th>年代</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1</td>
<td>23</td>
<td>白磁</td>
<td>鎮連弁文鉢（口縁部）</td>
<td>10世紀後半～11世紀初頭</td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
<td>17</td>
<td>白磁</td>
<td>橈葔文鉢（口縁部）</td>
<td>10世紀後半～11世紀初頭</td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
<td>32</td>
<td>白磁</td>
<td>碗（口縁部）</td>
<td>10世紀後半～11世紀初頭</td>
</tr>
<tr>
<td>4</td>
<td>27</td>
<td>白磁</td>
<td>碗（口縁部）</td>
<td>10世紀後半～11世紀初頭</td>
</tr>
<tr>
<td>5</td>
<td>31</td>
<td>白磁</td>
<td>鉢（口縁部）</td>
<td>10世紀後半～11世紀初頭</td>
</tr>
<tr>
<td>6</td>
<td>21</td>
<td>白磁</td>
<td>碗（底部）</td>
<td>10世紀後半～11世紀初頭</td>
</tr>
<tr>
<td>7</td>
<td>20</td>
<td>白磁</td>
<td>碗（底部）</td>
<td>10世紀後半～11世紀初頭</td>
</tr>
<tr>
<td>8</td>
<td>6</td>
<td>白磁</td>
<td>碗（底部）</td>
<td>10世紀後半～11世紀初頭</td>
</tr>
<tr>
<td>9</td>
<td>8</td>
<td>白磁</td>
<td>碗（底部）</td>
<td>10世紀後半～11世紀初頭</td>
</tr>
<tr>
<td>10</td>
<td>3</td>
<td>越州窯青磁</td>
<td>碗（口縁部）</td>
<td>10世紀前半～10世紀初頭</td>
</tr>
<tr>
<td>11</td>
<td>12</td>
<td>越州窯青磁</td>
<td>達弁文鉢（口縁部）</td>
<td>11世紀後半～12世紀初頭</td>
</tr>
</tbody>
</table>

図7 中国陶磁器
ガラスは10世紀から11世紀のものが中心である。今回の表面採集では、スタンプ装飾、カット装飾、ラスター彩装飾、型装飾などの装飾ガラスも発見され（図8-1、6-18、写真12）、10世紀から11世紀のものが中心であるが、ピンサー装飾など9世紀に遡る可能性があるガラス碎片（図8-4、5、写真12の下左端）の存在も確認された。

この港が機能した年代は、現在、筆者が発掘調査を継続中のシナイ半島南西部の港市ラーヤ遺跡およびかつて調査したバーディゥ遺跡（Kawatoko 1993a:186-202, 1993b:203-224）と同じ年代である。これらの遺跡の調査を継続し、比較検討することによって、紅海北部の初期イスラーム時代の様相が明らかにされると考えている。発掘の成果が大いに期待されるところである。

岩壁碑文調査
アラビア半島の岩壁碑文群に関する研究は19世紀に始めるが、主要対象は古代南アラビア諸語、ベドウィン文字を含む古代北アラビア諸文や古代南アラビア文字、ナバチア文字などによる古代碑文であった（写真...。“
写真8 白磁（内部）

写真9 白磁（外側）

写真10 白磁（内部）

写真11 白磁（外側）

写真12 ガラス器

写真13 クーファ書体アラビア文字（川床担当）と古代文字（徳永担当）

イスラーム時代のアラビア語碑文が対象となったのは、ジョサン Jaussen とサヴィニャック Savignac らの調査においてである。しかし、調査の主対象はやはり古代の碑文で、アラビア語壁文は付随的に記録されたに過ぎなかった。1951-52年に実施された St. J. フィルビーリ（Philby）、G. リックマンス、J. リックマンス（Ryckman）、P. リッペンス（Lippens）調査隊も同様であったが、A. グローマン（Grohmann）が同調査隊の写真資料を用いて297点のアラビア語碑文を収める碑文集（Grohmann 1962）を刊行した。その結果、これが最初のアラビア語壁文集となった。

筆者は2000年夏に実施した第18次ラーヤ・トゥール地域の考古学的調査の際にナサイ半島南西部のナーカース山Jabal Nāqūṣで発見した最大の岩壁碑文群を観察した。記録したアラビア語碑文940点を含む1663点の研究を進めることを決定した。これらの碑文が、実際には人が移動した遺物であり、生きた巡礼と交易ルートを示す証拠であることが明らかとなった。「海のネットワーク」の有機的に関連する「陸のネットワーク」の実態を岩壁碑文が明らかにするであろうと考えたのである。また、岩壁碑文研究がアラビア文字書体の研究に欠かすことのできない資料であること、ニスバの収集と研究によって地名、部族研究の資料となることが明らかとなった。

すでに、刊行された碑文集、報告書等によって、サウディ・アラビアが岩壁碑文の宝庫であることは周知の事実である。そこで、2001年1月に考古博物館の許可を得て、サウディ・アラビア王国の紅海沿岸部を中心に遺跡を訪問した。その結果を踏まえて、最初の調査の焦点をジャール～ヤンブ～マディーナ地域（図10）とナジュラーン～ビール・ヒマ～ヤダマ地域（図11）に絞った。両地域は巡礼と交易にとって重要な地域だからである。

2002年1月から3月、2003年1月から2月に上記2地域を調査し、マディーナ地域で511点、ナジュラーン地方で90点のアラビア語壁碑文を記録した。また、古代南アラビア語碑文とサムード碑文に関しては、マディーナ地域で80点、ナジュラーン地方で約6000点が記録された。これには、フィルビー、リックマンス、リッペンス調査隊、サウディ・アラビアの調査隊などが既に記録したものも含まれるが、新たに記録されたものが多数ある。特にアラビア語碑文に関して言えば、極めて多種多様で珍重された良質の碑文が多数発見された。ここに、アラビア語壁碑文調査に関わる概要を報告する。

ジャール～ヤンブ～マディーナ地域は、マディーナに隣接するフライシュアルfuraysh地域（290点、表1、写真14）、紅海岸近くのバドゥール地域（83点、表2）、そしてヤンブ～アンナフルyanbu～al-Nakhilとムサラスアル-Muthallath地域（138点、表3）に分けて調査した。また、南西部のナジュラーン地方のビール・ヒマ～ヤダマ地域（90点、表4）を調査し、合計601点のアラビア語壁碑文を記録した。詳細は表1～4を参照された。

さて、2003年1月までに記録した601点で明らかとなった重要な所見を列挙すると、1）年号付の碑文が14点あったこと、2）女性が刻んだ碑文が存在したこと、3）サウディ伝説に関する碑文があったこと、4）人的移動を示す碑文があったこと、5）古代南アラビア文字やヘブライ文字とクーパ書体アラビア文字が混在すること、6）アラビア文字がヒジュラ暦600年代に使われていたこと、7）ニスバの付いた人名が複数発見されたこと、8）場所によって使用される語句に相違があること、などが指摘できる。これらは、いずれも資料の更なる蓄積と今後の詳細な研究が必要とするが、以下に現時点での理解を述べることとする。

1）年代付の碑文はジャール～ヤンブ～マディーナ地域で511碑文中7碑文、ビール・ヒマ～ヤダマ地域で90碑文中7碑文であった。前者はヒジュラ暦23年・100年（写真15）、140年、170年、185年、1011年、1011年で、後者はヒジュラ暦27年、106年（写真16）、130年、173年、191年、193年、649年である。

現在までに、刊行された碑文集の主なものを見ると、年号の刻まれた碑文はマッカでは53碑文中6碑文、ルールRuwwāwでは55碑文中9碑文、ザイダ湖Darb Zubaydaでは70碑文中5碑文、イエメンでは302碑文中10碑文、フィルビーほか調査隊では305碑文中3碑文、ジャウフal-Jawf地方では47碑文中6碑文、ハーヴィルHa’il地方では190碑文中2碑文、その他合計1058碑文中
写真14 フライシュ地域

写真15 A.H. 106年の岩壁碑文（FRSh-005d）

写真16 A.H. 108年の碑文（Hannaq al-Sammā）

37碑文であった21）。これらの年代は、ヒジュラ暦49年以前が2碑文、50年から99年が10碑文、100年から149年が10碑文、150年から199年が9碑文、200年から249年が4碑文、500年代と600年代が各1碑文であった。

以上の年代を見ると、アラビア語による岩壁碑文はヒジュラ暦1世紀には盛んだり、2世紀に最大盛期に達したことがわかる。これはアッラーの御言葉であるアラビア語をより美しく表記しようとする書道の発展とも関係していたものと考えられる。同時に、アラビア文字の書体の変遷を論じるとき、岩壁碑文を無視することはできない。

さて、長い間、イスラーム時代最古の年代を持つ碑文として、ヒジュラ暦31年と刻まれたアスワン基碑があげられてきた（EL-Hawary 1939: 321-33）。われわれは2002年2月から3月の調査の際に、王国南部ナシャラ地区のフライシュ＝ウサウィーのWadi Khushaybaでヒジュラ暦27年ジュマーマ月（648年2月または3月）にヤズィード・ビン・アブドゥッラー・アッサルリー＝Yazid bin 'Abd al-Luh al-Salihiが刻んだアッラーへの告白の一様式イクルール iqārārを記した碑文を発見した23）（写真17、18）。

その後、2003年1月、数年前の考古・博物館学の調査で発見され、未公表であったヒジュラ暦24年に刻まれた碑文を検討し、この碑文を無視することはできない。

さて、長い間、イスラーム時代最古の年代を持つ碑文として、ヒジュラ暦31年と刻まれたアスワン基碑があげられてきた（EL-Hawary 1939: 321-33）。われわれは2002年2月から3月の調査の際に、王国南部ナシャラ地区のフライシュ＝ウサウィーのWadi Khushaybaでヒジュラ暦27年ジュマーマ月（648年2月または3月）にヤズィード・ビン・アブドゥッラー・アッサルリー＝Yazid bin 'Abd al-Luh al-Salihiが刻んだアッラーへの告白の一様式イクルール iqārārを記した碑文を発見した23）（写真17、18）。

その後、2003年1月、数年前の考古・博物館学の調査で発見され、未公表であったヒジュラ暦24年に刻まれた碑文を検討し、この碑文を無視することはできない。

<table>
<thead>
<tr>
<th>地点</th>
<th>論調日</th>
<th>碑文番号</th>
<th>北緯</th>
<th>東経</th>
<th>碑文数</th>
<th>碑文サイト名</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>22</td>
<td>021209</td>
<td>RGeG 001-003</td>
<td>24.12.985</td>
<td>39.13.197</td>
<td>3</td>
<td>al-Raghib</td>
</tr>
<tr>
<td>28</td>
<td>021209</td>
<td>RGeG 021</td>
<td>24.13.059</td>
<td>39.13.348</td>
<td>3</td>
<td>al-Raghib</td>
</tr>
<tr>
<td>30</td>
<td>021211</td>
<td>QL 001</td>
<td>24.12.325</td>
<td>39.12.908</td>
<td>3</td>
<td>Wadi 'Uwayqal</td>
</tr>
<tr>
<td>31</td>
<td>021211</td>
<td>HUJR 001</td>
<td>24.13.822</td>
<td>39.12.288</td>
<td>16</td>
<td>Mahajjar</td>
</tr>
<tr>
<td>32</td>
<td>021211</td>
<td>HUJR 002</td>
<td>24.12.778</td>
<td>39.12.359</td>
<td>2</td>
<td>Mahajjar</td>
</tr>
<tr>
<td>33</td>
<td>021211</td>
<td>SUWJ 001</td>
<td>24.13.964</td>
<td>39.10.298</td>
<td>2</td>
<td>Sijwa</td>
</tr>
<tr>
<td>34</td>
<td>021211</td>
<td>SUWJ 002</td>
<td>24.13.960</td>
<td>39.10.143</td>
<td>7</td>
<td>Sijwa</td>
</tr>
<tr>
<td>35</td>
<td>021211</td>
<td>SUWJ 003</td>
<td>24.13.849</td>
<td>39.10.022</td>
<td>9</td>
<td>Sijwa</td>
</tr>
<tr>
<td>37</td>
<td>021211</td>
<td>SUWJ 005</td>
<td>24.13.936</td>
<td>39.10.177</td>
<td>7</td>
<td>Sijwa</td>
</tr>
<tr>
<td>38</td>
<td>021211</td>
<td>HZRR 001</td>
<td>24.13.566</td>
<td>39.10.340</td>
<td>34</td>
<td>Hazr</td>
</tr>
<tr>
<td>40</td>
<td>021212</td>
<td>RFSR 001</td>
<td>24.12.198</td>
<td>39.15.084</td>
<td>27</td>
<td>al-Fursah</td>
</tr>
<tr>
<td>42</td>
<td>021212</td>
<td>RFSR 003-005</td>
<td>24.12.717</td>
<td>39.13.791</td>
<td>73</td>
<td>al-Fursah</td>
</tr>
<tr>
<td>44</td>
<td>021213</td>
<td>SDR 001</td>
<td>24.12.328</td>
<td>39.13.256</td>
<td>6</td>
<td>Sijd</td>
</tr>
<tr>
<td>48</td>
<td>021213</td>
<td>HZR 002</td>
<td>24.11.994</td>
<td>39.12.039</td>
<td>31</td>
<td>Hanz</td>
</tr>
<tr>
<td>49</td>
<td>021213</td>
<td>HZR 003</td>
<td>24.11.995</td>
<td>39.10.032</td>
<td>13</td>
<td>Hazr</td>
</tr>
<tr>
<td>50</td>
<td>021213</td>
<td>SDR 002</td>
<td>24.12.557</td>
<td>39.13.296</td>
<td>8</td>
<td>Sijd</td>
</tr>
<tr>
<td>55</td>
<td>021213</td>
<td>SDR 003</td>
<td>24.11.528</td>
<td>39.12.403</td>
<td>1</td>
<td>Sijd</td>
</tr>
<tr>
<td>56</td>
<td>021213</td>
<td>SDR 004</td>
<td>24.12.322</td>
<td>39.10.364</td>
<td>6</td>
<td>Sijd</td>
</tr>
<tr>
<td>合計</td>
<td></td>
<td></td>
<td>209</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

表2 バドゥル地区の碑文数と北緯・東経

<table>
<thead>
<tr>
<th>碑文番号</th>
<th>論調日</th>
<th>碑文番号</th>
<th>北緯</th>
<th>東経</th>
<th>碑文数</th>
<th>碑文サイト名</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>57</td>
<td>021206</td>
<td>KHY 001</td>
<td>23.58.570</td>
<td>38.55.943</td>
<td>3</td>
<td>al-Khyf</td>
</tr>
<tr>
<td>58</td>
<td>021206</td>
<td>KHY 002</td>
<td>23.58.767</td>
<td>38.56.068</td>
<td>1</td>
<td>al-Khyf</td>
</tr>
<tr>
<td>59</td>
<td>021206</td>
<td>KHY 003</td>
<td>23.58.376</td>
<td>38.56.237</td>
<td>31</td>
<td>al-Khyf</td>
</tr>
<tr>
<td>60</td>
<td>021206</td>
<td>KHY 004</td>
<td>23.58.378</td>
<td>38.56.277</td>
<td>14</td>
<td>al-Khyf</td>
</tr>
<tr>
<td>63</td>
<td>021207</td>
<td>HSN 001</td>
<td>23.50.255</td>
<td>38.53.012</td>
<td>2</td>
<td>Hossayyin</td>
</tr>
<tr>
<td>64</td>
<td>021207</td>
<td>WST 001</td>
<td>23.51.371</td>
<td>38.56.084</td>
<td>2</td>
<td>Wadi al-Nawi</td>
</tr>
<tr>
<td>65</td>
<td>021207</td>
<td>WST 002-1</td>
<td>23.51.452</td>
<td>38.56.030</td>
<td>2</td>
<td>Wadi al-Nawi</td>
</tr>
<tr>
<td>66</td>
<td>021207</td>
<td>WST 002-2</td>
<td>23.55.446</td>
<td>38.40.259</td>
<td>13</td>
<td>al-Subad</td>
</tr>
<tr>
<td>76</td>
<td>021209</td>
<td>IQ 001</td>
<td>24.10.072</td>
<td>38.58.002</td>
<td>3</td>
<td>Iqayq</td>
</tr>
<tr>
<td>77</td>
<td>021209</td>
<td>IQ 002</td>
<td>24.13.994</td>
<td>38.58.594</td>
<td>3</td>
<td>Iqayq</td>
</tr>
<tr>
<td>78</td>
<td>021209</td>
<td>IQ 003</td>
<td>24.13.982</td>
<td>38.58.618</td>
<td>3</td>
<td>Iqayq</td>
</tr>
<tr>
<td>合計</td>
<td></td>
<td></td>
<td>83</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>
### 表3 ヤンブゥ地区の碑文数と北緯・東経

<table>
<thead>
<tr>
<th>地点番号</th>
<th>前言文字数</th>
<th>北緯</th>
<th>東経</th>
<th>碑文数</th>
<th>碑文サイト名</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1</td>
<td>029130</td>
<td></td>
<td></td>
<td>12</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
<td>029130</td>
<td></td>
<td></td>
<td>13</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
<td>029130</td>
<td></td>
<td></td>
<td>14</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>4</td>
<td>029130</td>
<td></td>
<td></td>
<td>15</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>5</td>
<td>029130</td>
<td></td>
<td></td>
<td>16</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>6</td>
<td>029130</td>
<td></td>
<td></td>
<td>17</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>7</td>
<td>029130</td>
<td></td>
<td></td>
<td>18</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

### 表4 ビイル・ヒマー地区の碑文数と北緯・東経

<table>
<thead>
<tr>
<th>地点番号</th>
<th>前言文字数</th>
<th>北緯</th>
<th>東経</th>
<th>碑文数</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1</td>
<td>029130</td>
<td></td>
<td></td>
<td>19</td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
<td>029130</td>
<td></td>
<td></td>
<td>20</td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
<td>029130</td>
<td></td>
<td></td>
<td>21</td>
</tr>
<tr>
<td>4</td>
<td>029130</td>
<td></td>
<td></td>
<td>22</td>
</tr>
<tr>
<td>5</td>
<td>029130</td>
<td></td>
<td></td>
<td>23</td>
</tr>
</tbody>
</table>

写真17 ワーディー・フシャイバの碑文（上）とその転写（下）

写真18 ヤスィードのもうひとつの碑文（誤記が多い）

がジャーノードゥリヤの同席展示室で公表された。その後の碑文は、「私、スハイルがウマルが死んだ時、24年に書いた」と刻まれている211（写真19）。

ここで、不確かなものを挙げると、ムッサラスで発見したMThXth-009には、「サルマSalma212が23年（年）に書いた」と刻まれている（写真20）。この23年を示していない
写真19 公表された最古のアラビア語碑文（写真転載）

写真20 MThLTh-009j（23年の碑文かな？）

写真21 A.H.170年の岩壁碑文（FRSh-004bl）

写真22 ヒジュルの民に言及した碑文（HZR-002d）

写真23 アブー・アルムガイラの碑文（RGeB-001）

るとすれば、これがイスラーム時代最古のアラビア語碑文になる。

2）フライシュ地区の碑文が豊富な谷には、女性が刻者である碑文がひとつ確認された。FRSh-001 51は、「ズィヤードの娘アティカ・アティカ・ビン・ズィヤード」を刻し、委ねる。これを170年に書いた」というイククラールである（写真21）。初期イスラーム時代においては、女性の社会的地位は必ずしも低かったが、岩壁碑文を見る限りにおいて、女性の刻者名が極めて稀である。一連の調査ではこの1碑文のみであった。また、すでに刊行されている碑文集にもほとんどの収録されていない。

3）フライシュ地区の碑文（HZR-003 eとSDR-003）にはコーランに出るヒジュル民aslah al-Hijrに関する記述320（第15章80節）が見られる。若千の語句の相違はあるが、初期のコーランが大型家畜の骨のみならず岩壁に刻むという方法で記録にとどめられたかもしれないという可能性が指摘できる（写真22）。

4）フライシュ地区のマディーナ寄りのラガーヴイブ408 al－Raghaybで、アブー・アルムガイラAbu al-Mughayra bin Muhammad bin Abī al-Mughayraが刻んだイクラールを発見した（写真23）。この人物を調べたところ、サッド博士が調査し、登録したラワーヴラ第7号碑文（Sa’id al－Rashid 1992: 24-25）（写真24）と同一人物であることがわかった。この事実は、アブー・アルムガイラが、ある時ラワーヴラガーヴイブという約40km離れた地点を移動を示している。なお、2つの文字は筆跡が極めて類似しており、同一人物のものに間違いいないものと思われる。

5）岩壁碑文の後発グループであるアラビア語碑文は、すでに古代南アラビア文字、ペドウィン文字が書かれてい
ラバーナの跡に、あれば新しい岩壁に刻まれた（写真25）。ジャール・ヤンブッ～マディーナ地域では511アラビア語碑文に対して、ペドウィン文字碑文は80碑文に過ぎなかった。これに対し、ビール・ヒマー地域では6000以上の古代南アラビア文書、ペドウィン文字碑文に対し、アラビア語碑文は90碑文のみであった。岩肌を埋め尽くすように刻まれた碑文の際にアラビア語碑文が刻まれたのである。このような理解で登録を続けたところ、わずかではあるが、アラビア語岩壁碑文の上からペドウィン文字碑文が刻まれている場合があることが確認された。すでに、アラビア文字とペドウィン文字で併記された人名を含む碑文の存在が確認されているという情報もあるので、2つの文字が同時期に使用されていたことは確実な余地もない。現在、古代南アラビア文字との切り合い関係を調べているが、古代南アラビア文字とペドウィン文字が同時期に使用されていたことは間違いないので、この2つの文字は初期イスラーム時代においては、同時に使われていた可能性が高い。このような仮説を下に考察すると、プレイスラーム時代からイスラーム時代まで、常に重要な交易路であった同地域で、アラビア語碑文が極端に少ない理由がわかるのである。このことは、ある地域のイスラーム化とアラビア語化は別々

なお、サキーブ族のニスパが書かれた碑文

に考えるべきであるということを示唆しているのである。

6）アラビア語の発明が早い時期にあった。しかし、読書きに便利で計算にも便利なアラビア語の普及は、急速に達成されたわけではない。理由は改編が容易であるためであろうと考えられる。

年号に関しても、アラビア語の使用例は遅く、ヒジュラ暦900年後に入って一般的になった。コンドでも、オスマン帝国時代のものにアラビア語の使用が一般的に認められる。

ワーディー・フシャイバで発見されたスライマーーン・イブン・ジャアファルとアッサディーSulaymān ibn Ja'far al-Sa'dīが刻んだ祈願文には、アラビア語で649年（西暦1251/52年）と刻まれている（写真26）。アラビア語の使用は私的なものが公的なものに先行すると考えられるので、今後の考古古文書と岩壁碑文の研究が重要な意味を持つ。
ことになるであろう。

7）アラブ諸部族の名前は、本人の名の後に父親の名を数代連なるものであるが、最後に部族名、出身村・都市・地域・団名、あるいは職業名を付けて、より明確に個人を同定する場合がある。これらはニスバと呼ばれる。

今回の調査では、サルル族、サキフ族（写真27）、ムザイナ族、サラバ族とザミーナのニスバを持つ人名が発見された。特に、サルル族のニスバはブラシゅ地区とビール・ヒマーレ地区のアーン・ザバーメンDhabahで発見されている。部族の歴史、テリトリー、移動などを研究するための資料となるであろう。また、プレ・イスラーム時代のものも含めた人名の蒐集は人名、部族名、地名研究に新しい光を当てることであろう。

8）601碑文の文章、使用されている語句には地方差が顕著である。シナイ半島南西部のナースクス山の岩壁碑文940碑文も含めて、判読できたものを検討して得られた結

果を以下に記す（ただし、以下に挙げる数字は確定したものではない）。

- ghafaraおよびその派生語が使われている碑文はジャール・ヤンブゥマディーヌ地域（以下では北と表

記する）で99碑文、ビール・ヒマーレ地域（以下では南と表記する）では28碑文であった。一方、ナースクスでは73碑文であった。

- aminaおよびその派生語が使われている碑文は、北で71碑文、南で3碑文、ナースクスで3碑文であった。

- 信仰告白は、北で54碑文、南で2碑文、ナースクスで178碑文であった。

- anəで始まるものは、北で37碑文、南で0碑文、ナ

ースクスで0碑文であった。

- raˈhimaおよびその派生語が使われている碑文は、北で3碑文、南で31碑文、ナースクスで30碑文であった。

- wathqaおよびその派生語が使われている碑文は、北で28碑文、南で0碑文、ナースクスで36碑文であった。

- allaˈhumməで始まる碑文は、北で23碑文、南で3碑文、ナースクスで40碑文があった。

- asˈalで始まる碑文は北で10碑文発見されたのみである。

このような地方差は顕著である。今後の詳細な研究は使用語句の相違の意味をより明確にすることになるであろう。

9）人名の同定はまだ完了していない。名前で見てると、FRSh-004 mの刻者イブラヒームIbrahim bin 'Abd al-Rahman（al-Umarri）は、「マッカ史」によれば、マッカの法官奇edgeであった。FRSh-003 gの刻者アブド・アッラフマーンAbd-al-Rahman bin Hassānは104年に死んだとされている。また、FRSh-005 aの刻者アブド・アッラフマーンAbd al-Lahin bin Awsの名に関する記述は見られない。ただし、完全に同定するには、より豊かな時間が必要である。

今回の調査で特筆すべきことは、ヒジュラ暦100年代を中心として年代の刻まれた碑文が高比率で発見されたことである。また、女性名で書かれた碑文、出自部族名を示すニスバを含む碑文などが発見され、今後のルート研究、部族研究、地名研究、人名研究、書体研究などを極めて重要な資料を加えることとなった。

これはサッディ・アラビア考古学雑誌Atlal第17号に提出された文章を日本語に翻訳し、若干の手を加えたものである。

## 註

1）調査の母体は、サッディ・アラビア考古学研究会である。そして、この研究会は日本西アジア考古学サッディ・アラビアプロジェクト、日本ナイル・エジプト考古学サッディ・アラビア小委員会、日本考古学会サッディ・アラビア研究会によって構成されている。なお、2001年の訪問調査は中近東文化センター研究費とトヨタ財団助成

金（福永氏）によるものである。2002年は福永氏のほか、倉本健司（京都大学文学部古代文化研究科教授）と村井純代（同研究会研究員）、2003年は原橋重浩（株式会社アラビアン調査課長）と池野憲（株式会社アラビアン技術部）が参加した。

2）Al-Fahd 1989（校訂）Khitāb Sīyās Jazīrāt al-'Arab, Bagh

dad, p. 84; Ibn al-Faqīḥ 1967（校訂）1302 Muḥāṣṣar Khatāb al-
Balūdīn, M. J. de Gejoe（ed.）, Leiden, p. 78; Abū Ubayy al-
Bakr al-Andalusi 1945（校訂）Muṣṣam maʿaṣaṣ-iʿaṣaμan, al-
Qahira, Vol. 1, p. 7; Abū Mūmīn al-Ḥiyayrī, Khatāb al-
Rūqād al-Muṭṭar fi Khubār al-Aṣṭār, al-Qahira, n.d., pp. 153-


ルダーズビは2日行程としている。Ibn Khurāṣhhībīh 1967（校


4）ibid., p. 19.

5）現在のドゥーブa Dubaである。


7）Al-ʿIṣṭākhrī, op. cit., p. 27; Yaquq, op. cit., p. 92.マケートはジャカルとアイランのところに10日行程としている。

8）後に述べるカラフQaraf島であると考えられている。Euc

ycopedia of Islam, Al-Jabrの項を参照のこと。

9）現在のスタンであるとスグーンの歴史家の多くは考えている。

Qahira, p. 654.


12）Al-Muqaddasī 1967（校訂）Aḵṣam al-Taqāṣīm fi Muṣṣam al-
Aṣqalān, M. J. de Gejoe（ed.）, Leiden, E. J. Brill, p. 83 & 97 (初版1877年)。

13）Arrām bin al-ʿAṣbagh al-Sulaimī 1973（校訂）Khitāb Asmāʾ Jibāl Tihāma wa Sukkālīn, Naṣṣār al-Muḥāṣṣar fi al-
Dawm, Vol. 5, al-Qahira, p. 398. これらの記載は彼後の地理学者等が引用している。

14）1 mi＝4000 dhīrūで、約2.3km。

15）Al-Muqaddasī, op. cit., p. 83.

16）教育省考古・博物館局（現在は考古・博物館館）は、観光情報遺

文書2003年）
跡分布調査を実施する際、王国を紅海を北から北西部、西部、南西部、中央部を北から北部、中央部、湾岸部を東部、という通路区間に区分した。

17）5点の基準と道路（道路GPSで測定したデータである）は、①北緯24度35分35秒、東経35度22分31秒、②北緯23度39分55秒、東経34度43分25秒、③北緯23度35分15秒、東経34度14分15秒、④北緯23度32分45秒、東経33度46分35秒、⑤北緯23度25分35秒、東経32度45分25秒である。

18）中国崩壊の観察と実験は青山学院大学教授の平家詰俊夫氏、ガーナスの観察と実験は中近東文化センター研究員の真道洋子氏が担当した。ここに記し、感謝の意を表するものである。

19）彼のアサルarriv博士Prof. Dr. Abd al-Rahman al-

アサルの影響を受けて、ベドウィン文学とする。

20）この調査は総合的考古学調査で、碑文調査対象であった。得られたアラビア語碑文は18点に過ぎなかった（Juessen and Savigrac 1990-14）。

21）建築物などに刻まれた碑文の集成は1980年代から刊行されている。

22）古代南アラビア文書をベドウィン文字碑文に関しては、調査に参加したアザル新氏がまとめている。

23）預言者ハムドーンがマッケの縄を破ったベドウルの戦いがあったと。


25）写真はトムスターサレーレが27年ジュマム月に撮ったうちの部分のみ掲載したが、その前の「アッラー、サマールド・ラ・アド・アッラー・・・・に哀れみを示しまた、・・・tarażham al-Lah 'alā Yad dan 'Abd al-Lāh」と書かれている。なお、この碑文の上方の岩には同一人物の題文が刻まれているが、アップとフローラの単語を誤認識して（写真18）。

26）毎年1月頃にジュマムで開催される王国伝統文化祭の考古・博物館展示室に写真が展示され、配列されているバンケットに写真が掲載されている（A Selection of Islamic Inscriptions from the Kingdom of Saudi Arabia issued by the Deputy Ministry of Antiquities and Museums, Ministry of Education on the Occasion of the National Festival for Cultural Heritage in Janadria, 8 February 2003）。